近代の迷宮

磯田光一

北洋社

著者紹介

昭和6年横浜生れ。東京大学英文科卒。文芸評論家。

著書 『殉教の美学』『パトスの神話』『比較転向論序説 ―― ロマン主義の精神形態』『文学・この仮面的なもの』『戦後批評家論』『正統なき異端』『吉本隆明論』『悪意の文学』『砂上の饗宴』『邪悪なる精神』ほか

近代の迷宮

一九七五年三月二十五日　第一刷発行

著　者　磯田光一

発行者　伊藤金吾

発行所　北洋社

東京都千代田区富士見二―二―一

電話(二六四)〇五五一　〒一〇二

振替　東京一三三二四三

印刷所　浩文社

製本所　大製

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

© Koichi Isoda 1975

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

I
ハイド氏の修辞学——花田清輝論 9
テロルの寓話——大江健三郎論 27
兇器のダンディズム——澁澤龍彦論 43
孤絶の近代人——永井荷風論 60
II
オデュッセウスの帰還——伊藤整、高見順再考 75
〝家霊〟探索者の運命——太宰治再考 99
敗北への情熱——北原武夫小論 116
言語における〝攘夷〟と〝開国〟——江藤淳『一族再会』論 124
III
参加と離脱のディレンマ——文芸季評74・4〜6 149

リアリズムの振幅——文芸時評74・10～12　171
(1) その語義と現代　171
(2) 小説と文明　189
(3)「虚構」の根拠　206

IV

〝私権〟としての「ワイセツ」——ポルノ裁判について　227
ニーチェと三島由紀夫——ディオニソスの使徒　231
歴史意識の倫理化——小林秀雄と戦争　237
『悪霊』のかなたのムイシュキン——大岡昇平と戦争体験　241
日韓ナショナリズムの暗部——左翼征韓論への疑問　246
内面化した戦後——桶谷秀昭『批評の運命』　251
〝神聖ドイツ帝国〟の心理と論理——『わが闘争』をめぐって　254
あとがき　264
初出一覧　266

近代の迷宮

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ハイド氏の修辞学——花田清輝論

1

三島由紀夫のエッセイ『重症者の兇器』のなかに、次のような西洋中世のお伽噺が紹介されている。「魔法使いを射殺するには彼自身を狙っても甲斐なく、彼より二三歩離れた林檎の樹を狙うとき必ず彼の体に矢を射込む」というのである。

このいささか意味深長な挿話には、文学における〝虚構〟と〝レトリック〟の意味がきわめて深い地点で暗示されていると思われる。魔法使いを直接に狙った者が結果として魔法使いの手中に陥ってしまうように、思想上のドン・キホーテ（たとえば日本浪曼派）を倒そうとする人々が、まさしく対象に猪突猛進していくことによって自らもドン・キホーテになってしまうという事例は、今日でも跡を絶っているとは思われない。こういう日本の知的風土のなかに花田清輝氏の文学を置いてみるとき、昭和初年に小説『七』から出発し、近作『小説平家』や『室町小説集』に至るまでの氏の作品群が、

魔法使いを倒すために「彼より二三歩離れた林檎の樹」を狙うという、戦略的な狡智に裏づけられていたことは、ほとんど疑う余地がないと思われる。それなら〝魔法使い〟と〝林檎の樹〟との間に広がる断層は、近代日本精神史のうちではいかなるものを意味していたのであろうか。

花田氏の小説の方法論を考えるに先立って、ここで私は、蓮田善明が戦時中に書いた永井荷風論と、花田氏の『荷風の横顔』(昭和二十三年一月)とを比較してみたいという誘惑をおぼえる。この両者の距離は、昭和精神史の全振幅を象徴しているし、この両者の中間項に位する曖昧な部分を切開することなしには、花田氏の文学の批評性を正当に位置づけることはきわめて困難であろうと思われるからだ。まず蓮田善明のいうことを聞こう。

> われを国より放逐せよ、われは詩人なれば、と荷風は恒に己に言いきかせている。これは歴史なく民族なき亡命的な世界主義者の言葉とは異るものである。深い過去を守る此の永生のいのちをもつ詩人の自負である。

この蓮田善明の荷風観を、国粋主義者の言説として一笑に附するわけにはいかない。蓮田にとっては、守るに値いしない〝近代〟から放逐されることが、逆説的に伝統につながりうる契機と考えられ、そこから蓮田は〝国〟に絶望した荷風のうちに、ネガティヴな〝愛国〟を見るような地点に突き進むのである。今日、このような荷風観を批判するのは、きわめて容易なように見える。しかし私のいいたいのは、蓮田善明に対立する立場にある人々の荷風観が、じつは蓮田を裏返しただけのものではな

いのか、ということである。アウトサイダーとしての荷風のうちに、〝絶対主義国家〟への憤怒を見る小田切秀雄氏の見解も、荷風の孤立のうちに芸術家の孤高を見いだす北原武夫氏の見解も、芸術家の反社会性に幻想をいだいているという点では、じつは蓮田善明を裏返したものといってもよいのである。なるほど何らかの反社会的な契機なくして、近代の文学は成立しないかもしれない。しかし芸術家が反社会的な位相にあるということと、その位相に幻想をいだくこととは、まったく別問題のはずである。少なくとも花田氏にはそう見えた。荷風を孤高の〝詩人〟と見る荷風観から脱落しているもの、それが〝政治戦略家〟としての荷風のリアリズムにほかならない。『荷風の横顔』のなかで、花田氏は公然と次のように書くのである。

目的のために手段をえらばず、機にのぞみ変に応じて即座に打開策をみいだす、こういう老獪な人物に狙われたやつこそ災難だ。すなわち、かれは、その文学青年に貸金を踏み倒されて泣寝いりの状態にある、いくじのない高利貸の役割をたくみに演じ、煙草屋の女房にかの女の間借人の生活を洗いざらいしゃべらせてしまうのだが、これはなかなか誰にでもできる芸当ではなく、高利貸としてのかれの演技が、いかに水ぎわだったものであるかを証明しており、わたしは、かれの戦術（アギタチオーンス・ワイセ）よりも、むしろ、かれの煽動方法（クークチーク）に、いっそう天才的なものを感ずる。（中略）つまるところ、この横顔の持主は、円転滑脱、俗の俗なるものに通じ、悪党としても、まさに一流の域に達しており、文学青年出身の小悪党どもをとっちめることくらい、まったく朝飯前の仕事なのだ。

こういう側面から荷風を評価する花田氏にとって、〝孤高の詩人〟として荷風を聖化する人々が、広義のロマン主義者、つまり蓮田善明のヴァリエーションに見えたであろうことは、想像にかたくない。上記の引用の結末部で、花田氏が荷風にとうてい及ばぬ「文学青年出身の小悪党」について語るとき、それは戦前の私小説の作家たちから小林多喜二までを含むところの、広義のロマン主義者をさすといってもよいのである。

むろん花田氏が、荷風の心に宿る〝詩人〟に気づいていなかったとは思われない。そういう一面をジーキル博士とするなら、戦略家としての荷風はハイド氏であったというべきかもしれない。ジーキル博士を崇拝する「文学青年出身の小悪党」の鼻をあかすこと、そのために花田清輝という名のハイド氏は、一つの戦略を選びとったのである。つまり、魔法使いを殺すために「二三歩離れた林檎の樹を狙う」という戦略を。

2

昭和六年、「サンデー毎日」の応募小説として入選した『七』は、次のような文章で書き出されている。

大学の書庫のすさまじい書物の堆積裏で、ただ一人の読者も持つことなく、ページも切られずに忘れられていく不幸な、あるいは幸福なかずかずの書物と、そうして、その著者の群とがある。彼らはそれぞれの秘密を抱いて、静かに時と共に流れていく。

処女作の書出しの部分が〝書物〟についての記述であるという点は、花田氏の文学を考える上でかなり意味ぶかいことと思われる。体験よりもブッキッシュな知識を駆使し、事実よりも論理とレトリックを重んじる氏の作風の萌芽を、ここに見いだすこともできるであろう。しかし興味ぶかいのは、「それぞれの秘密を抱いて」「忘れられていく」書物が、ここで問題にされているという点である。それぞれの書物は、おそらくそれぞれの伝説をもっているにちがいない。そういう伝説、ないしは埋もれた迷宮への嗜好が語られている点では、小説『七』は迷宮探索の文学と見られないこともない。じじつ歴史の迷宮に探りを入れるという試みは、花田氏の小説の大きな特色の一つでさえもある。だが『七』に見られる〝書物〟のニュアンスについて考えていくとき、そこにはもう一つの側面があるように私には思われる。

読者はここで、ドン・キホーテが騎士道の〝書物〟を読むことによって、はじめて行動の規範を手に入れたことを思い起してみるべきであろう。『七』の主人公のペーテルが〝七〟という数字の魔力に魅入られていくのは、彼が〝書物〟を通じて数字の神秘を知ったからであり、こうして〝七〟という数字は彼自身の宿命になっていく。このとき個体にとって宿命とは、つまるところブッキッシュなものといってもよいのではないか。自我などというものはありはしない。あるのは〝言葉〟ないしは〝神話〟の集積だけだ。そういって極端に聞えるならば、人は既成の神話のシステムから何ものかを選びとることによって、はじめて彼自身であることができる。端的にいえば、ドン・キホーテが騎士道のパターンに自己を同一化させながら彼自身の運命を完成していったように、ペーテルもまた

〝七〟という数字に吸い込まれることに、無限の生きがいを感じているのである。

こういう人間像の定着を、昭和六年という時代のなかに置いてみるとき、『七』の作者が時代のうちに何を見ていたかは、ほぼ推察がつくのである。花田氏と同世代の人々の生きたマルクス主義の教条、それも〝七〟という数字とどれだけの隔たりがあったであろうか。いや、文学者の反社会的な孤独を、格別の意味があるかのように特権化することも、〝七〟という数字を崇拝するのと何ら異なるところはないではないか。しかもペーテルは〝七〟という数字に魅入られることに、不安からの解放と甘美な陶酔を感じている。それなら同時代の左翼急進主義も、私小説作家の孤独も、精神的なオナニーと異なるところはないではないか。昭和初年の現実がこのように見えてしまったとき、当時二十代の青年だった花田氏は、だれよりも新しい作家になっていたのである。このとき花田氏にとって回復すべきものがあったとすれば、あの〝孤高の詩人〟としての荷風のイメージとはまったく逆に、〝老獪な悪人〟に通じる領域であったことはいうまでもない。そして読者は、その思想の基軸を『七』のもう一人の人物、マックスのうちに見るであろう。

〝七〟に憑かれたペーテルがドン・キホーテの末裔であるかぎり、彼の行動形態の帰結を冷徹なマックスは知りぬいている。だからこそマックスは、決闘で確実に勝利を得ることができた。

——取引には調査が必要だよ。マックス・シュルツは徹底的に調査する。結果のわからない仕事には手を出さない。

——命の取引きには、なおさらのことじゃ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com